



そろばんと論語

そろばんと論語

昭和四十九年四月二十二日発行

国際ロータリー第三六六地区

パストガバナー

職業奉仕委員長

塚本義

07

そろ

口一夕
ばん文
庫蔵書

論語

一、そろばんと論語	一―一〇
二、今の世相と職業人としての ロータリアンの姿勢について	一一―二〇
三、「サービス」の考え方	二一―二七
四、暴走	二八―六〇

そろばんと論語

(大阪ロータリークラブ)
昭和四九・三・二二)

大阪ロータリークラブの草創時代に土屋元作という人がおりました。号を大夢と呼びます。大正十三年の入会ですが、わがクラブのチャーター・メンバー高原操、高石真五郎など新聞界の大物を育て上げたところの操觚界の大先輩であります。土屋大夢は毎日新聞にも朝日新聞にも籍を置いたことがあります。また、大正九年、私が国際通信社へ入社した当時には国際通信社の海外新聞部に顧問格としておられたのでよく承知しております。

土屋大夢はその号の如く飄飄乎とした大人物で、かつ博識でありました。大阪ロータリークラブの運営や活動方針に対して常に正論を吐き、会員を教育

するところが多く、しかも人柄のよさから會員に大へん親しまれました。徳川幕府後期の農民学者—二宮金次郎（尊徳）をば、ロータリー以前に生まれたロータリアンであるとして、日本中はもとよりアメリカ辺りまでも出かけて、吹聴して回ったことは有名であります。

彼れのいうところを少し受け売りいたします。

めぐる水車

ロータリーは回転を意味するが、二宮尊徳も常に回転、循環の訓えを説いている。植物は種から発芽、生長、開花、結実、そして再び種に戻って循環する。循環と関連して水車の話がよく出ます。水車は輪回するものでありますが、人の道も水車のようなものと思えばよい。その形の半分は水流に順い、半分は流水に逆らって回転する。もしまるまる水中に入れば回わずして流さる

べし。また、もし水を離るれば回わることあるべからず。それ仏教にいう高德、智識の如く、世を離れ欲を捨てたるは、水車の水を離れたるが如し。また凡俗が教義に耳を傾けず、義務も知らず、私欲一辺倒に執着するは、水車をまるまる水中に沈めたるが如し。共に社会の用を為さず。ゆえに人の道は中庸を尊ぶ。水車の中庸は宜しき程に水中に入れて、半分は水に順い、半分は流水に逆らって運転滞らざるに在り。人の道もそれと同じように、天理に順いて種を蒔き、天理に逆らって草を取る。欲に随うて家業を励み、欲を制して義務を思ふべきなり。（二宮翁夜話第三節）と言っております。

湯船の論し

さらに二宮尊徳は、人のために善を尽すことがやがて自らを利することになると言つて、多くのたとえを挙げております。有名なのは「湯船の論し」で

す。弟子の福住正兄という人が箱根の湯本に温泉を持っていましたが、二宮尊徳がある日、この弟子の兄と共に温泉につきり、湯桁に腰をかけながらこういうように教えました。

世の中にはお前たちのように物持ちでありながら、十分であることを知らずにあくまでも利をむさぼり、不足を唱えるのは、あたかも大人が湯の中に立って屈まないで、湯を肩にかけて「湯船が甚だ浅い。膝にも達しない」とつぶやき罵るようなものだ。もしお湯をその望みのように深くすればどうなるか。小人・童子は入浴できなからう。これは湯船が浅いのではなくて、自分が屈まないのが間違いなのだ。世間で富者が不足を唱えるのはこのたとえと何処が違おうか。分限を守らなければ千万石ありとて不足に感ずることであろうと。

また、尊徳はこういう風にも諭しました。湯に入ってお湯を手で己れの方に搔けば湯は我が方へ来るようだが、すぐ向うへ戻ってしまう。反対に、向うへ

手で押しやればやがてわが方へ流れ帰る。少し押せば少し帰るし、強く押せば強く帰る。これが天理というものである。夫れ、仁といい義というは向うへ押す時の姿なり。わが方へ搔く時は不仁となり不義となる。人体の組み立てを看よ。人の手は我が方へ搔くことができるが、同時に向うの方へも押せるように出来ておる。これ人道の元なり。鳥獸は然らず。わが方へ取り込むのみ。人たるもの、先方へ手を向けて他人のために向うへ押すことを忘れるは、人にして人に非ず、すなわち禽獸なり。あに恥しからざらんや。ただに恥しきのみならず、天理に背くが故に終には滅亡す。我れ常に奪うは益なく、譲るに益あり。よくよく玩味すべし。(同第三八節)これはロータリーのモットー *He profits most who serves best* と全く同じ意味です。

義を先に利を後に

二百五十余年の昔、大丸を創業した下村彦右衛門翁は、一行商から身を起した人であるが、一代にして東西の三都ならびに中京に堂々たる店舗を開設し、百貨店業界に覇を競うまでに発展しました。その標榜した旗印は「義を先にし利を後にするものは栄ゆ」でありました。商売道において、まず志すべきは、富の集積にあらず、利権の獲得にもあらず、取引の誠実と顧客へのサービスであることを道破し、繁栄はこれに伴って後からついてくるものであると訓えたのであります。これまたロータリーのモットー Service Above Self (サービス第一、自己第二、米山梅吉訳) と全く符合する考えかたであって、あまりにも似ていることに驚きを禁じ得ません。この店祖の教訓に随って代代経営されてきた大丸が今日の繁栄を続けていることも宜なるかなと申せましょう。既に故人となられたが、大丸社長であった里見純吉、北沢敬二郎両君はわが大阪ロータリークラブの元会長であり、かつ、地区の元ガバナーをもつとめたりっばなロータリアンでありました。

そろばんと論語

明治・大正の時代における実業家の第一人者に渋沢栄一翁があります。彼れは明治五年に初めてわが国へ銀行制度を導入し、また、通貨制度を改革して、日本に自由主義経済の基礎を築き上げた人であります。渋沢翁は常に「経済と道徳の合一論」を説かれた。そして彼はこれを「論語とそろばん」と表現しました。右手に算盤、左手に論語だと教えて、明治年代の財界人を指導されたことは有名であります。まことに明快な言葉です。車に両輪が必要な如く、単なる利益追求の一輪車では走れない。永續きはしない。「道徳」というもう一

つの輪を備えた上での利潤でなければ多くの人の信頼は得られない、また、真の繁栄もあり得ない、と説くのでありました。

今を去ること五十一年前、ロータリー国際大会がアメリカのセントルイスで開かれた折りに、大会決議第二十三の三十四号として可決された、そして、今日もなお依然として生きておるロータリー哲学を諸君はご承知でしょうか。こう言うのです。

「根本的にいうと、ロータリーは、自己のために利益を得ようとする欲望と、他人のために尽さねばならぬという義務感との間に、常に起きる心の中の争いを和解して調整しようとする人生の哲学である。この哲学はサービスの哲学、すなわち *Service Above Self* (サービス第一、自己第二) の哲学であり、そして *He profits most who serves best* (最もよくサービスするものに最大の利得あり) という実践的倫理の原則に基礎をおいている。」

神と獣の間

以上いろいろと引用しましたが、煎じ詰めればみな同じことを教えているのに気が付くと思います。結局のところ、人間は神様でないが、動物とは違う。動物のような生き方、つまり、自己本位だけの生き方をすれば人間とは言えない、ということでもあります。

近ごろの日本人はエコノミック・アニマルだと西欧人から悪口を言われている。この罵倒に対してわれわれは、卒直に、心静かに反省が必要だと思っています。明治百年にして日本は物質文明の頂点を味わうことができたが、同時に、古い伝統の美しい心、気高い東洋道徳は、日本人の中から失なわれつつある。片や物質、片や道徳の秤のバランスが崩れ去ろうとしています。私欲の方がピョンと跳ね上がり、他人を思いやるサービスの精神が急降下したのであります。

この世代にこそロータリーのサービス精神の運動が最も要求されて然るべきだと思ふのです。著名な実業人がテレビの画面に、あるいは国会の議場におおぜい現われて、糾弾をうけたり、あるいは誤解を招いている如き事件が将来なおも続くとするならば、日本の自由主義経済体制は正に危機と言える。体制崩壊の危険なしとは誰れも断言できないでしょう。自己本位に過ぎる、憂うべき現世相に臨んでこそ、「サービス第一、自己第二」をモットーとする社会生活、個人生活に、われわれロータリアンは改めて挑戦すべきではありませんか。

(おわり)

今の世相と職業人としての

ロータリアンの姿勢について

第三六六地区内

ロータリークラブ会長様

一筆啓上いたします。

最初にわれわれの使う職業奉仕という言葉がありますが、これはご承知の如く、ヴォケーションナル・サービスという英語の翻訳ですけれども、余り上等な日本語とは申し難いように思います。何故ならば、言葉の意味に曖昧さがあった誤解を招きかねないからです。社会奉仕が「社会への奉仕」であるなら職業奉仕は「職業への奉仕」であろう。僕はもっぱら「職業奉仕派」だよ。例会出

席は二の次さ、などと冗談とも理屈ともわからぬことを口にするロータリアンに時折り出合います。これは「職業を通じてのサービス」 service through business という本来の意味をわざと曲解するかののような言い方だと思われるす。

また、奉仕という文字ですが、これは英語の「サービス」の意味するところといささか異なった感じを与えます。そのために誤解される心配が多分にあると思うのです。大いに商売で儲けてその金の一部を社会へ還元、奉仕すればよいのだ、というような解釈をする人がいないでしょうか。金を寄付したり、物を与えたりするのは施しであって、あるいはこれを「奉仕」と言うかも知れませんが、サービスとは違います。

そこで、サービス（あるいは奉仕）の主体に関してであります。ロータリアンのサービスは、すべてロータリアン個人がするように求められております。

サービスを心掛ける同志の集まりがロータリークラブであります。クラブという集団がサービス（あるいは奉仕）するのではない。とりわけ、ヴォケーショナル・サービスは、会員めいめいがその職域で行なうべきことであって、クラブがこれを代行してあげることが不可能なのです。

しからば、クラブの職業奉仕委員会は一体何を為すべきなのか。それは一人の会員に職業奉仕本来の意味および原則を徹底し理解せしめて、その実践を求めることが最大の任務と申せましょう。これに関しては左記の諸文献を参照、ご利用願いたいと思います。

一、国際ロータリー編集の「奉仕こそわがつとめ」一四〇ページ

二、第三六六地区職業奉仕委員会発行の

「職業奉仕の勘どころ」昭和四六年 九三ページ

「サービス思想の意味するもの」昭和四七年 六六ページ

もしもロータリアンが一人残らず、サービスの真の意味を正しく理解、体得して実践するならば、職業奉仕の委員会は最早、存在の理由を持たなくなるでありません。ところが事実にはさにあらずです。近ごろの新聞、雑誌、放送は毎日のように社会の諸悪行を報道して、中でも環境の損傷とこれに伴うさまざまな人間の不幸を目立って多く伝えます。その主要原因をなすのは経済の高度成長による副産物だと推測されますが、副産物であるからとて許されるはずのものでないことは自明の理であります。

戦後、わが経済成長の主役をつとめたのはロータリアンを責任者とする企業が多く、その功績は大きく評価されるべきだと思います。しかし功績の裏には罪過が伏在し、今それが表面に現われてきたのであります。そのために今日、ロータリアンおよびロータリークラブに対する世間の眼はまことにきびしいものがあることを私どもは感知しなければなりません。

ここでわれわれとして反省せねばならぬ点は、もしもロータリーが半世紀も昔から説いている所の「職業を通じてのサービス」の真の意味が十分に、正しく理解され、かつ、実践されて来たならば、現在人びとに迷惑をかけている環境汚損は決して起らなかつたであろうし、又、起つたとしても、今のように甚大ではなかつたであろうということであります。

環境の問題だけではありません。高度成長に付随して発生した企業間の過当競争、また、企業間のシェアの争いに基因すると思われる徳義無視の行為がしきりに伝えられます。残念なことに、それらの中にはロータリアンの主宰する企業の名やロータリアン個人の名前すら掲記されることが一再ならずあって、私どもは互いに大きい衝撃を受けるのであります。

ロータリーの目的は『実業および専門職業の道徳的水準を高め……』しかし

て、ロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するために、その職業を品位あらしめること』と書いてあります。この目的に従って活動すべき旨を誓約の上で私どもはクラブへ入会を許されたことをロータリアンは想起すべきであります。

『わが職業の基準は、人間共同社会に対する思いやりの気持ちを表明するものであらねばならない。わが取引、わが欲望、われをめぐる諸関係は、社会の一員としての最高の義務を常に考慮に入れる心構えをもって行なわらるべきである……』『社会通念の上から普通人が拒絶するような機会を不当に利用して、これによってかち得た人の成功は、これを合法ないしは徳義に叶うものとは認められない。同様に、道徳的に疑問があつて他人が退けている機会をば、わが物質的成功のために利用するが如きことは、われは決してしない。』この文句は今から半世紀以上も前の一九一五年七月、サンフランシスコにおける第六回ロ

ーター大会で採択した「ローターの道徳律」Code of Ethics の一部を抜粋引用したものです。

前述の如く、職業奉仕は「職業への奉仕」では決してなく、職業を通じて人間社会へサービスすることであります。人間社会の幸福の為に存在すべき産業経済、そしてその中核である企業が、逆に害毒を流していると世間から非難を受けたとき、それがもしロータリアンである場合は、その批判に應えて世間の納得を得られるように行動すべきであります。人が率直に誠意を示す時、世間は必ず理解すると思ひます。ヴォケーショナル・サービスこそはローターの根本を成すところのサービスであり、信条であります。もしもこの根本の信条に対して世間が疑いを持つに至るならば、ローターの行なう他のもろもろのサービスも一片の空文と化するでありましょう。それはローター運動の崩壊であります。

『ヴォケーションナル・サービスが判らない、という人があるならばその人はロータリーの重要な役に選ばれる資格はなかったと、私は敢えて申したい。また、実際そういう人はロータリーの記章を胸に帯びる権利も資格もないのです』とはっきり言ったのは、国際ロータリーの本年度理事で職業奉仕担当のジェームス・ランベス君 (James F. Lambeth) であります。

以上ながながと書き連ねましたが、一言もってこれを覆えば、ロータリアン一人一人が自分の職業に対する姿勢如何ということに尽きましよう。

そこで当委員会はここに提言いたします。貴クラブの職業奉仕の委員会において、クラブ・フォーラムにおいて、毎週の例会において、上記の諸点に関して真剣な検討を加えられ、各会員が自己反省をする機会をつくっていただきたい。今日のような複雑な社会・経済情勢の下にあってこそロータリーの目的は重要な意義を持ち、また、一層その効果が発揮させるべきだと思えます。各口

ロータリアンは、ロータリーの本質につながる現今の諸問題に眼をつむらず、難問を避けて通ることなく、正々堂々と正面からこれと取り組んで下さることを切望する次第であります。

□ 討論課題の例

- (一) 職業奉仕とは「職業を通じてのサービス」であることをクラブ全員に周知徹底せしめるにはどうしたらよいか、又、どのような事をしたか。
- (二) 環境汚損に対し、多少を問わず関係を持つ企業の経営者としてロータリアンはどうしたらよいか、又、どのような事をしたか。
- (三) 買い占め問題あるいは不徳義な取引などを含む企業の過当競争に対しロータリアンはどうすればよいか、又、どのような事をしたか。
- (四) ロータリアン各自が自己の職業を通じてのサービスは実際にどうであるか。「職業奉仕採点表」(註)を使用して、あるいは、これを参考として

自己反省の結果はどうか。

(註) 国際ロータリーで印刷したものは二十項目から成る(用紙第六〇〇七J)。クラブによって独自に修正印刷してもよい。この内容は「職業奉仕の勤どころ」第八〇―八三ページに掲載されています。

なお、貴クラブで右各点につき検討を加えられた結果を、また、会員の示した反応を本年十二月末までに、当委員会へご一報下さることが出来れば望外の幸わせに存じます。

敬具

昭和四十八年九月二十五日

国際ロータリー第三六六地区職業奉仕委員会

委員長	塚本義隆(大阪)
委員	池田悦治(大阪西)
委員	飯沼剛(堺)

「サービス」の考え方

(大阪淀川RC例会
四九・二二・十五)

ロータリーには、九月に世界理解週間、十月に青少年活動週間、十一月にロータリー財団週間、一月に雑誌週間、二月にロータリー創立記念日の週間といった、いろいろな週間がありますが、職業奉仕週間は設けていない。当地区だけが設けている週間で、どうもこれは日本独特のもののようなのです。「職業奉仕はむずかしい」とか、「わかりにくい」という声をよく耳にするので、尾形繁之ガバナーが作ってみようと提唱されたのでありまして、ことしで三年目です。

サービス団体はロータリーのほかに、クラブ数も会員数も多いライオンズク

ラブ、またキワニスクラブといったものがあり、ライオンズクラブはテキサス州ダラスのロータリアンであったメルビン・ジョーンズが、ロータリーの社会奉仕活動は手ぬるいといってロータリーを退会して作ったもので、キワニスクラブは物質的な価値よりも、精神的な価値を重しとする考え方で活動しているクラブです。わがロータリークラブはすでに六九年前から、自分の職業を通じてのサービスということを最大の活動目的として集まっている団体です。そこに違いがあります。

ロータリーは一業種から一人の会員を選ぶという、そういう基本的な原則のもとにできているクラブですから、従って自分の職業分類を重くみて、大切に、自分によって代表されている職業をよりよいものに、より品格の高い、よりりっぱなものにし、それによって人様のお役に立とうということがねらいです。

従って、この本質を忘れて、他のサービス団体のはなやかな活動に、ロータリーがひきづられることがあってはならない。しかるに職業奉仕がわかりにくいとか、むずかしいとかいうことで、そのままにしていることは、その会員の怠慢であろうと思います。真剣に職業奉仕とは何だろうかということに思いをめぐらし、ご研究も願いたいのです。

ロータリーには四大奉仕部門がありますが、ロータリークラブが困って起ったところのヴォケーショナルサービス（職業奉仕）が一番大事であることはいうまでもありません。四年前に亡くなった大阪RC会員であった北沢敬二郎君は、二〇年も前からロータリーの四つの部門を、古くから日本に伝わっている「修身、齐家、治国、平天下」という中国の古典「大学」に書いてある言葉が、四つの部門にちょうど相当するという説明をしておられました。

つまり、修身はクラブ自身の活動に該当し、齊家は職業奉仕に該当する、治

国は地域社会に貢献すること、平天下という言葉は妥当ではないかもしれないが、さんが国際奉仕に該当するというわけです。ロータリーとしても歴史的にこの順番で次々に目的が広がってきた。はじめからはっきり四つの奉仕部門があったわけではないのです。

さてロータリーの「サービス」とは何だろうか。これは *Think of others; Help to others* という言葉に尽きる、それ以外の何ごとでもないということだと思います。

では、われわれは「サービスの理想」といいますが、「理想」とは何だろうか。字義の通り解釈すれば、自分たちの現実世界にはないような、理想郷的なことを考えるかも知りませんが、私は「サービス」と「理想」とを並列に解釈します。 *Idea of service* は「サービスという思想」であり、これを完ぺきにしたいというのが *Ideal of Service* つまり「サービスという理想」です。

そのサービスというのは人様のお役に立つように、人様のことを考え、行動するということに尽きるわけです。

ここで、一言触れたいと思うのは、戦争中に聞いた「滅私奉公」という言葉です。戦争中はそれで仕方なかったと思いますが、ロータリーのいうサービスはそういうことを意味していません。奉仕という言葉を聞くと「滅私奉公」と似た考え方になるおそれがあるので、私は奉仕という言葉がきらいなんです。私がロータリーに入ったのは四十年前ですが、そのころ先輩から教えられたのは「サービス」で、「奉仕」という言葉はなかった、戦争の中ごろから奉仕という言葉が入ったんです。「仕え奉る」というのは下から上への関係です。しかしロータリーのいうサービスはそういうものではない、右左横の関係です。

ロータリーのサービスは「滅私奉公」ではない、人間がみな神仏ならば「滅

私奉公」もできましようが、われわれは人間で、欲望もある。この欲望を全部殺してしまつて、何もかも捧げるということでは、今日のようなロータリーの発展はなかつたと思います。

ロータリーのモットーに *Service above self* と *He Profits most who serves best.* という二つの言葉がある。 *Service above self* は「超我の奉仕」と直訳しておられますが、私には実にわかりにくい。米山梅吉さんは「サービス第一、自己第二」と訳されており、自己よりもサービスをちょっと前におくという意味にとつております。

外国の方々は *Profit* という言葉が気に入らないと見え、 *Service above self* だけをロータリーのモットーとして優先的に使おうという議論が出て、一昨年六月に国際ロータリーの理事会がその決議案を規定審議会に出したところ、大多数で否決されてしまい、このモットーは両方並べて掲げなければなら

ないということになったわけです。

このモットーの考えは決してロータリーの専売特許ではなく、二、五〇〇年前から東洋にある。それは「易経」の中にある「積善の家には必ず余慶あり」という言葉で、 *He Profits most who serves best* と同じ考え方だと思えます。もう一つは日本に昔からある「情けは人のためならず」です。

ロータリーは決してむずかしい、人のできにくいことを要求しているわけではなく、非常に平凡な人生哲学だろうと思えます。

最後に、サービスはだれがやるのか、それはクラブがやるのではない。諸君会員自身です。

暴 走

(大阪倶楽部午餐会)
(四八・十一・二十六)

皆さん今日は。ただいまご紹介いただきました塚本義隆でございます。きょうは暴走という題を掲げました。暴走という字を字典で調べてみましたら、(一)むやみに走る。(二)運転者の乗っていない車が走り出す。こういう意味があると書いてあります。ところで暴という頭文字のつく言葉がいろいろあるけれども、二、三調べてみると、暴動は英語でライオット、暴風—ストーム、暴漢—ラファイアン、暴行—アウトレイジ、暴利をむさぼる—プロフィティア、暴落—スランプ、暴力団—テロリスト、暴食—ヴォレシテイ、こういう工合に日本語に対してちゃんと英語の字があるのですが、暴走という字は英語の字引き

を調べてもはっきりした言葉がないんです。強いて翻訳すればツー・ラン・ヴァイオレントリーというぐらいしかないんです。意識しなければ一字ではない。どういう訳で日本語だけに暴走という字があるのか、つらつら考えてみるとイギリスやアメリカなどの国には暴走という現象があまりなく、日本特有の現象であると私は解釈するんですが、どうでしょうか。

丑年の暴走

さて、今年は丑年でございました。牛歩——牛の如く歩むというのでありますから、今年は何となく思いますが、事実はこちらに反して全く暴走した年ではなかったか。あえてこの題をつけた所似であります。

先きほどご紹介がありました、私は長老と言われて面映ゆいのであります

けれども、今年の一月一日に倶楽部から手紙をいただきました。お前は本年から八十路会に自動的に入会したからさようご承知あれということでした。「自動的」というのはロータリーではよく使う言葉ですけれども、まさか大阪倶楽部が八十路会に自動的にはめ込むとは思わなかったのですが、そういうことで長老と言われたのかと思います。しかし事實は当たらないようです。

ついでに、年のことを言いますが、私は甲午「きのえうま」なんです。馬と
いうのは牛とは逆に非常に早く走る動物だと思っ
ているんですけれども、私自身はそれとは正反対で非常にのろいんです。ここの倶楽部に入っていたのは昭和七年でありますから四十一年前ですが、この五年前に特待社員という
辞令をいただきました。今は会費はただです。だから非常に気兼ねでここへ来
にくいんです。食事は払いますけれども年会費を払わないんです。しかしこ
れは皆さんのお蔭でありまして、たいへん有難く、お礼を申し上げます。

今も飯島幡司先生と話をしていたんですけれども、私は昭和二十三年の秋、
三年間の抑留生活を経てソ連から引き揚げてきました。その時はこの倶楽部は
ここにはありませんで、朝日新聞社の北側に朝日会館という真っ黒なビルがあ
りました。その三階だったかはっきり覚えておりませんが、一室か二室を
大阪倶楽部が借りて会合をしておりました。そこへ行ってソ連での三年間の印
象を話したことがあります。ソ連から戻ってきたので、何か話せということ
でしたが、当時は栄養失調で顔色も青黒い土色をしていたらしく、「お前、ま
だ生きとるか」ということでありました。それ以来、本日ここへ立つのが初め
てなんです。非常に有難い仕合わせで、これまたお礼を申し上げたいと思いま
す。

皆さんは七十才になると勲章をもらわれるんですが、私は八十才ですけれど
も勲章をくれません。やはり暴走しておらん証拠だろうと思います。勲章をも

らわれた人はみんな暴走した人に違いない。こういう午餐会ですから、あまりむずかしい話をして皆さん、居眠りをなさるから多少冗談話でも入れないと座が持たんと思います。

「暴走」した丑年ですが、なぜ暴走したかと言うと牛の角に火をつけて……ま、角さんに火がついて無茶苦茶に暴れ走り回ったということではないかと思えます。二、三の例を挙げましょう。ついこの間、十一月の終わりに熊本の大洋百貨店が火事を出して百人の人が死んでおります。あれなんかも私は非常に不思議に思うんですが、まっ昼間、何千人も人がおるところで火が出てそれを消す人がおらんというのはどういう訳だろう。あんな大火事になるのはおかしいという気がします。また、大金の横領というのがありました。今朝もテレビで見たのですが、九億八千万円という大金を滋賀銀行の一女行員、奥村彰子（あや、四十二才）というのがかすめ取った事件の話をしておりました。この

倶楽部の会員で「ドケチ教の教祖」の吉本晴彦君が相手に出て話していたのを聞いたんですが、彼の説によると、『九億八千万円を使ったのは山県というタクシーの運転手、かすめ取ったのは奥村という四十何才かのオールドOLですが、彼らはそんなに責められはしない、むしろそういう状態でコンピューターという化物（ばけもの）にほったらかしておいて、それを監督しておらなかつた銀行の偉い人達にあるのと違うか。九億か七億かしらんけれども、それをギャンブルで使わしたギャンブルというもの自体がおかしいんじゃないか。一女性を責めたり、一運転手を責める前に 外の人を責めるべきではないか』と言うんですが、私はこれに大いに同感したわけでありませう。

贈収賄というのも多数ありましたね。今年は特に贈収賄がひどかったと思います。この間、大阪の千里ニュータウンで土地をヤミで知人に流した。今度はそれを解放するというので 七万何千人かが、何とか自分のものにしようにとし

た。あれも一種のギャンブルではないかと思えます。

十や二十の区画に七万人もが申込んで当たるわけはありません。当たるだろうと思うのはちょうど富くじを買うのと同じ心理で、これもやはりギャンブルではないかと思えます。

そのギャンブルですけれども、今朝のテレビによると、競馬は今年一年で一兆円の馬券が売れ、そのほか競輪、競艇も入れると全国で二兆円の金が流れたということですよ。とんでもないギャンブル時代でありまして、これもやはり暴走と言わなければいけません。

いろいろ悪口を言うか判りませんが、差しさわりがあつたらどうぞ年に免じてお許し下さい。大企業がいろんな買い占めをやる——土地を買い占める。食糧を買い占める、日用品を買い占める。そこで庶民はものすごく困っている。大企業は値上がりの元凶になっているとも言われております。今年の一

番の問題はインフレだと思えます。

私は経済学者と違うから飯島先生に聞かなければ判らんけれども、どこに原因があるのか知らんが、少なくとも昔すかんぴん（素寒貧）であった日本が百九十億ドルもの外貨を集め、それが見返りになって日本円のお札になって市中にはらんらんした。素人の考えとして、一、二年の間に百九十億ドルも外貨が溜ったということがインフレを起こした大きな原因の一つではないかと思うわけです。

このように暴走した結果、空気や水や土地、最後には人間まで汚染、汚職、汚損され、また金（かね）があるからといって浮かれてヨーロッパやアメリカへ飛行機で旅行する。そしてハイジャックにつかまって醜態を暴露した。海外旅行者は今年百万人とか二百万人とか言われますけれども、こういう、とてつもない状態を引き起こした原因はみな同じじゃないかと思えます。

ごく最近には例のアラブの石油問題、これも暴走です。アラブはアラブで理由はあるのでしようけれども、世界中の人を苦しめるようなああいうやり方はまことに困ったことです。しかしこれは石油だけでは納まらないと思います。きつとあれは天然資源のナシヨナリズム（国家主義）につながります。そうすると石油に限らず資源を持っている国はあの真似をし出さんとも限らん。銅を持っていてる国は銅を売らんようにして値を上げる。鉄鉱石を持っている国は鉄鉱石を売らんようにしようじゃないかということをやられたら、資源の何もない国はその日その日を一喜一憂して目を白黒しなければならぬ。日本としてはまことに困ったことになっていくのじゃないか。

けさの新聞には石油を少し余計に生産するとか、日本へは少し余計に売ってやるとかいう記事が出ておりますので、ホツとしておられる方があるかとも思いますが、そういうことで一々喜んだり悲しんだりする。これはわれわれ日本

人お互いにちょっと考え直さなければいかんのではないかという気がいたします。

暴走のマスコミ

企業のことを批判する力は私にはないんですが、私が仕事上での関係を持つマスコミの悪口をちよつと言わしてもらおうと思います。さきほどもここへ来て飯島さんに、「新聞やテレビの悪口を言おうと思ってやってきたのに、あんなが目の前におられては困る」と言ったら、「何でもいいから言え」ということでですから勇気を鼓して申し上げることにいたします。

まず 新聞

まず新聞ですけれども、現在、日本新聞協会に加入している日刊新聞社が百

十一社あります。日本は人口一億に対して三千百万世帯、これに配られる新聞は（一年前の統計ですが）三千八百十六万部。これは朝刊も夕刊も合わせて一部としての計算ですが、朝刊だけの新聞、夕刊だけの新聞もありますから、そういうものを別々に計算すると五千六百万部という実に膨大なる部数であります。つい一週間前までは大新聞は一部四十ページの新聞を出しておった。朝刊が二十四ページ、夕刊が十六ページでした。急にここ一週間前から減りまして朝刊十六ページ、夕刊八ページ、合計二十四ページに減りましたけれども、とにかく今迄はどえらい紙を使っておった。

私はさる九月中頃に北海道を旅行して苫小牧というところで王子製紙が新聞用紙を作っている日本最大の製紙工場へ見学に行きました。工場の人に案内してもらっているいろいろ話を聞いたのですが、日本では新聞だけで月に二十万トン、年に二百四十万トンの紙を使っているということでした。苫小牧で新聞の

用紙を製造し始めたのは北海道の山林の木材を原料にして紙を作ろうというところから工場ができたのですが、現在は北海道の木材は枯渇して、若干の例外を除いて殆ど使っておらず全部輸入です。皆さんはこれをどう思いますか。資源ナショナルリズムになって、日本へは木材を売らぬと言われたら、その日からたちまち日本の新聞は全部ストップということになります。もう少し新聞の悪口を言いたいんですが、工合の悪い方はちょっと耳を塞いでおって下さい。

私は新聞は読みますが社説は読まないんです。あんな詰まらんものはありませんね。あれは何を言っているのかさっぱり判らん。主張らしきものは何にもない。あれは解説ですわ。それでは論説とか社説という字は冒瀆ではないか、ニュースを分析して知らすだけに終っている。こうすべきだ、こうしろとはあまり言わない。ちょっと大きな活字で印刷しておりますが、私は読まないん

です。皆さんも恐らく読まないのではないかと思います。記事では大きな字の見出しだけは読めるけれども本文の記事は読めない。私は近眼ですから老眼鏡を使っては見えないし、眼鏡をはずしても読めない。というのは活字が小さすぎるのです。あれは偏平活字と言って縦が短くて横が長い。その偏平活字の七ポイント——もっと小さいかも知れんですが、とにかく小活字で読めやません。だから私は見出しだけしか読まない。どうしても本文を読まなければならん場合には天眼鏡を上へ当てて読まなければならぬ。こんな不深切な新聞を平気で作っている新聞社の社長はじめ役員の人達の気が知れない。あれでもって新聞を読んでくれるかと思っているのか。私はとにかく読まん、読めないんです。

どうしてああいう小さな活字になったのかというと、これにはいわく因縁があるんです。昔は新聞の広告料（広告を掲載して貰う費用）は一行幾字いくらという単価であったのです。ところがだいたいぶん昔から改正されて現在は一センチ四角が何円というスペースを単位とする料金です。だから記事がどんな大きな活字であっても小さい活字であっても、広告料には関係はないんですが、昔の習慣により依然として一行幾らという単価があるかの如き感覚で小さい活字を使っているんです。

私らが若かった頃は新聞一ページが八段でした。半分に折ると上半が四段、下半が四段でしたから活字は今の二倍位大きい。この頃は一ページが十五段です。一行十五字詰で広告料を勘定すると、活字が小さければ小さいほど広告料は高くなるので、新聞社は自動的に得になるんです。そういう考え方でだんだん小さい活字になって来た。私は新聞社の幹部の人に、何故にあの活字を大きくできんのかと昔から何回も言うんですが、「それはやらなければいけませんけどなあ」と言うだけで今もって実行せんです。きょうは言いたいだけこの

とを言わせていただきます。

記事の内容についても偏向しているとか、嘘ばかり書きよるとか、いろいろ言われます。批評の一部は本当で一部はそうでないでしょうが、批評を受けておることは事実です。私は今日の新聞記者諸君は勉強が足りないと思うんです。昔の新聞記者は実際よく勉強したものであります。私も新聞記者ではないが新聞通信社の記者であったから、間違ったことを書いたらいかん、正確第一ということで一生涯懸命に勉強していましたが、この頃の若い人達は大学を出て採用試験を受けて一旦パスとなると、後は余り勉強しないのではないですか。勉強していたらもうちょっと正しい記事を書くと思います。割合に間違った記事が多いということは、皆さんが直接に関係の深い記事をごらんになるとすぐ判ります。

しかし自分の知らないことからは間違っているも判らないので、新聞は本当

のことを書いていると思うけれども、自分が知っている限りの記事を読むと非常に間違いが多い。これは記者が勉強しないからであります。私は偏向があるかないか知らんが、仮りに記者に思想偏向があっても、そんな臭いのある記事とか、事実が間違っていないかどうかをチェックするために、担当部長とか、あるいは、整理部長とか偉い人がいるんです。編集局長なんかは直接一々タッチしません。

あれは主に対外的な役で、内部ではなかなか記事を見るひまがないから編集局長も知らず、社長はもちろん知らんわけです。従って新聞社の組織には改善すべきところが多くあると私は思っております。

新聞も今年で創業百年の歴史を持つに至ったのですから、新聞社は使命の原点に立ち返って真剣に考えてもらわなければいかんのではないかと思います。殊に先程の話の、活字の小さいのをもう少し大きくしてほしいという世論に

(単に私一人の論ではありません) 耳を貸してほしい。皆さんもそういう声を高めてほしい。これが一番いい所です。日本の活字は漢字ですから劃が多いんです。ローマ字のように劃がない、読みやすい字ならば小さくても読めますが、日本のように少なくとも三劃、四劃、五劃、多いのは十劃も十五劃もあるような漢字を偏平活字の七ポイントで印刷されたら読めるものではない、読めたら嘘ですね。日本人が眼鏡をかけるのが多い元凶の最大は日本の新聞だと思ふのです。

次に週刊誌

次には雑誌に移ります。昔からある月刊雑誌はしばらく別として、近年は週刊雑誌というのがあります。これが現在どのくらいの数が出ていると思えますか。五十四種類あるんです。そして一年間に十一億冊発行されております。で

すから月に一億冊ぐらい印刷されておるわけです。日本の人口は一億ですから、赤ン坊も小学生も合わせて月に一部ずつ週刊誌を買っている勘定になるわけです。一年の売り上げが千二百億円、月に百億円です。一冊百円とすればちょうど勘定が合うわけですね。

そもそも週刊雑誌というのは新聞社が出したものです。というのは大きな新聞社には何千人という記者がおり、その記者達が集めてきた記事が新聞の紙面に載らないのがすごくたくさんあり、没になった記事が闇から闇へ消えていく。これは惜しいから何とか利用する方法はないかということ、たとえ三日や五日遅れてもいいような記事は週刊雑誌に載せようということによって作られた週刊誌が「週刊朝日」とか「サンデー毎日」というものであった。それが日本の週刊誌の起りだと私は思います。余った記事を活用しよう、活字も新聞の活字を使おう、紙も新聞の巻取紙を使おうということから出たものだと思います。

います。その後、文芸月刊雑誌が真似をして「新潮」とか「文芸春秋」などが週刊誌を発行するようになりました。部数も新聞社が出している週刊誌はあまり多くない。一回分四十万部ぐらいが止まりです。一週四十万部、もっと少ないのがあります。

ところが新聞社以外のところが出している週刊誌の部数はものすごく多く、四十万部はおろか、五十万部から七十万部、最高のものは八十万部を印刷しているんです。これらは大体市井のゴシップとか、あまり好ましくないエロ記事を売物にしてやっているわけです。これは大変な紙の乱費ではないかと思いません。しかしこんな週刊雑誌が繁盛するのはやはり買うてくれる人があるからで、こういうものを好んで読んでいる人の方がおかしいと思います。私は週刊誌を読みません。あんなものを見ていたら踊らされて右往左往せざるを得ないと思います。

おつてテレビ

今度はテレビの話です。テレビはご承知のようにNHKと民放——民間放送、または商業放送とかコマースナルテレビとか言いますが、要するにNHKと、それ以外の会社組織の放送があるわけです。これらの局数はどれくらいあるだろうかと調べてみると、NHKは総合テレビというんですか、これが日本全国に三百八十局、NHK教育テレビが三百七十局、合計七百五十局を持っております。受信料（聴視料）が一年に千百六十三億円、月に大体百億円の収入があるわけです。対象になっている聴視者は統計に出ているのが全国で二千四百六十九万人、そのうちカラーテレビが千八百八十二万人、ですからカラーは全日本の総世帯数に対して六〇%以上の普及率になっております。それ以外の白黒も合わせると総世帯に対して八〇%以上になっているわけです。

民間放送は、現在、日本には会社の数がテレビだけで八十七社あって電波を出している放送局は八百六十八局あります。ですからNHK一つと民間放送全体とでは似た勢力になっているわけです。ところが今申しました千百六十三億円の聴視料は全部NHKに入ってしまったって民間放送には一文も入りません。民間放送の経営は全部広告収入で賄われております。いわゆるコマーシャルと言われる広告によって収入を上げ、その収入によって八百六十八局の経営が来ていているわけです。

これらのテレビ局が受け入れる広告収入は一年に三千億円であります。日本全体の広告総額は今年一年間に一兆円ですから、そのうちのおよそ三割を民間のテレビ局が上げている勘定になります。三千億円というとはぼ新聞の年間の広告収入と匹敵いたします。新聞のほうが少し多いんですけれども大差なく、全広告収入の三分の一が新聞の収入となっております。

ここで考えなければいかんことは、民間テレビ局は全部広告収入によって経営をしておるから広告主の意向は尊重しなければならんという事実です。このテレビ番組は怪しからんから飛べせと、倫理委員会があつてひどいものは修正してくれとか、断わってくれと言いますが、多くは広告主の意向も尊重してテレビの画面を創作しなければならぬのです。広告主は広告料を払ってテレビに出すわけですから、自分の企業を皆さんにPRして、品物を買ってもらふような状態にもつていくためには視聴率（自分が出している番組を見てもらう率）がよくなかったら広告はしません。

全然誰も見ないような番組だったら広告の価値はないからです。だからそこに入ってくる広告の文句はともかくとして、それを見えてくれる番組を作らなければ駄目だ。そうなるとう勢い大衆、殊に若い年令層の人達に受けるような画面を作ることが絶対に必要だということになるわけであります。

その結果はどうなるか、結局、週刊雑誌と同じようなことになるのじゃないでしょうか。少々内容が粗雑であっても、面白い受けのいいような番組をテレビに出して視聴率をよくしておいて、そこにちよいちよいを入れるコマーションルを売り込まなければ民間放送の経営は成り立たない。こういうことを考えるとかそこ狂ったものがありはしないかと私は感じるのです。白黒もカラーも合計して日本中のテレビ受像機の台数は四千六百七十万台あるのです。朝の六時から晩の十二時までと言いたいが、この頃はもっと超過して（私は夜中に見ないので知りませんが）一時半でも二時半でもやっているらしいですね。但し、来年から自粛するらしいけれども、ものすごいサービスをやっているわけです。こんな国は日本だけで世界中のどこにもありません。

テレビは非常な力を持っている。それが否応なしに家庭内に侵入してくるからです。ですからその番組がもし悪かったら大変なことになると思います。

一億総白痴化という言葉もありますが、悪い番組を見せたら本当に日本人をみんな狂わしてしまうことになりかねません。そうすると広告主の発言権を押えるためにはNHKが全部取り上げている聴視料の若干を民間放送に分けるようなことを考えないといけない。われわれはNHKだけを見ているわけではない。民間放送も非常にたくさん見ている。それなのに聴視料をNHKが全部取り込んでしまつて民間放送はゼロだ、こういう今の国の方針は面白くないし、フェアでないという気が私はいたします。

NHKのことを悪く言うて済みませんが、この間、東京の内幸町の放送会館を売り飛ばし、その代金が三百五十四億円。これは予想よりも二倍の金額でものすごく儲かったわけです。新聞を賑わしましたが一坪（三・三平方メートル）当たり一千万円で売れて大いに儲かった。ところが、それが影響して外の一一般の土地の値段まで高くしたのは間違いないことだと思います。

儲け過ぎた金はどうしたかというところ、NHKも世評を恐れたかどうか知りませんが、そのうち百二十億円を吐き出して放送文化基金というのを作ることになり、来年の二月頃から財団法人の組織にして世間の為になることをやろうということ、十九人の運営委員が任命されて発表されました。

私の知っている人もその運営委員の中に何人か入っているんですが、これは悪い解釈かも知れませんが、大企業ががめつい商売をやって儲け、その一部を寄付などして社会還元だという格好をしているのと同じようなことになりませんか。どうもそんな気持ちがあるわけです。

産業の暴走

しかしマスコミだけが暴走しているわけではない。産業界にも狂ったところがあると思います。『二十一世紀は日本の世紀だ』などといって煽ったヤツが

いる。ハーマン・カーンというアメリカ人ですが、これは全くGNP一本を基礎として予測したもので、いまの調子で日本が高度生産を進めていったらアメリカを追い抜いて世界一になるぞ。二十一世紀は日本の世紀だ。こういうわけですが、こんなことを言われると日本人はすぐに調子に乗って、自分は偉いんだなあ、とうぬぼれるのですが、どっこいそうは行かないと思います。

GNPが上がったことは事実です。

皆さんには釈迦に説法ですが、今から十年前の日本のGNPは二十四兆円、現在は百十兆円だと言われております。そうすると十年間に四倍半になり、年に十五パーセント以上という急激な増加をしている勘定になります。こういう暴走を続けた結果が今日の日本の現状かと思えます。そしてその副産物として樹木が枯れたり、魚が死んだり、人間が喘息になったり、不具者が出たりした。これは暴走の結果であり、当然ではないですか。

ところでここにペッチェイという人がおるんです。六十五才のイタリア人ですが、彼は、「行き過ぎた経済成長は繁栄どころか悲劇を招くだけである」と申しております。「われわれは天然資源を浪費している。一日一日を非常事態の中で暮しているんだ、何かが間違っている」。こうペッチェイは言っております。ペッチェイという人はかつてフィアットというイタリアの会社の重役をやっております。オリベッティという会社の副会長でもありました。

今日でもなお多くの大企業の役員を兼ねている実業人なんです。そのイタリアの実業人が最近二、三年間そういう風なことを世に広く訴え、彼自身も反省しておるわけです。このペッチェイという人は近頃有名な、皆さんのお耳にも入っているところのローマクラブの創設者であります。

私は経済という言葉を考えてみるんですが、経済という字を一字一字とってみると何のことか判らない。これは字引きによると経世済民ということばの略

字なんです。経世（世の中を治める）済民（民を救う）ということの略字であります。字典の説明によると、「日々の生活をよくして人間の仕合わせを目的としている」こういうふうに書いてあります。

ところが今日では、人間の仕合わせどころか、吸うことのできない空気、飲むことのできない水、食べることのできない魚、こういうものを作り出した。これが高度成長の結果であるとしたならば、これを計画した国の政治家、これを実行した技術者、実業人は己れの頭の悪さを反省して天下に謝罪すべきではないか。これは少し暴論かもしれませんがそういうふうに見えることもできるのではないですか。同時に高度成長のための尖兵を勤めたのは実は広告業です。

私の所属しておる（株）電通はじめ日本の広告業者がその片棒を担いだことは間違いない。それは企業家の依頼によって 広告を製作したのであるけれど

も、一生懸命に努力して高度成長のお手伝いをしたことは間違いない。ですからこの際、一大転換をしてこれまでのような考え方から抜け出して本当の経世済民のための尖兵を勤めなければならないのであらうと思います。

その次に石油の話ですが、石油産出国のアラブも確かに暴走したと思えます。しかしこのアラブ諸国に振り回される原因を作った日本を含む世界の産業国はアラブ以上に醜態ではないか。全部をアラブに依存するような政策を打ち出していたのはやはり考えが足りなかったのじゃないか。しかし一方で、石油パニックは天の与えた訓戒で非常に有難いというふうに解釈して、これからの教訓にこれを生かすべきであらうと思えます。

「高張は絶弦を生ず」という言葉がありました。それは中国の顔延之（西暦三八四～四五六、劉宋時代）という人が「秋胡行」という詩の中でうたっている一句です。つまり、あまり張り過ぎた弦は切れる——ということを意味して

いるのです。今更そんなことを言うのはおかしいのですが、千六百年前にすでに顔延之が詩にうたっているのです。

真の仕合わせ

あと二、三分でやめたいと思いますが、一体人間はどういうところに仕合わせを求めたらいいのかということを私は申上げたかったです。物量の世界、つまり大量生産、大量消費ということからは人間の本当の幸福は求め得ないと思います。ということになればそれに代るものは何だろう。ここ一、二年前から時々耳に聞く言葉に「生活の質」（クオリティ・オブ・ライフ）というのがあります。それを考えなければならぬ時代に今日なってきたと思います。高度経済成長を続けておって幸福がきたかという点、そうでなかった。逆に、まことに悲惨な状態を現在発生しつつある。ということになればGNP、国民の総

生産高というもので計ることはやめなければいけない。そして何か新しい目安になる基準を、探求しなければならぬ。こういうことであろうと思います。

この頃、政府がよく口に出し、マスコミもよく使う福祉国家——福祉という言葉は私には余り心よく響かない。抵抗を感じるんです。皆さんはどうでしょうか。福祉といえば、がめつく儲けた者が儲けの一部分を困った人に分けてやるといふ考え方が中にちらっとのぞいている。福祉という文字そのものにはそんなことは入ってはおりません。福祉は幸福の福であり、祉は示偏に止まるという字で、両方とも幸いという意味です。けれども、どうもこの頃いわれるところの福祉国家という考え方は、それとは少し違っているのじゃないだろうか。

私は、そもそも生産なり、販売なり、あるいは消費なりを人の良心に従ってよい物を作り、よい物をできるだけ安く売り、りっぱな物を使って喜んでも

らうという、つまり、他人のことを思いやるという考え方で行かないといけない。がめつい方法で、がめつくもうけた中の一部分を困った人に分けてやればいいという考え方は間違っている。

福祉という言葉はウェルフェアという英語を直訳したものであろうと思いますが、「福祉国家」が果たして幸福につながるか。一例は、スウェーデンとかイギリスとかいう高度の福祉政策をとっている国が一体幸福なのだろうかというのを反省しなければならぬと思います。

子供はまことに幸福だと思います。それは夢があるからです。大人になってくると夢を持ちにくい。静かにものを考える時間を持たなかったら人間らしい人間でない。動物と変らぬではないかという気がこの頃つくづくおぼろしくおぼろしく。暴走をやめてほしい。息切れをやめなさい。そして一度休んで考えなさいということをおし上げたい。

来年は寅年です。虎は千里を走るといいますが、来年は千里も走らないで虎穴に入って休養しておってほしい。しばらく冬眠してほしいというのが私の結論でございます。

一詩を朗詠して丑年を送る言葉といたします。

中 庸 元 田 永 孚（二八二八一八九二）

勇力の男児は勇力に斃れ

文明の才子は文明に酔ふ

君に勸む須く中庸を択んで去るべし

天下の萬機は一誠に帰す

（おわり）

そろばんと論語

昭和四十九年四月二十一日 発行

国際ロータリー第三六六地区
パストガバナ
職業奉仕委員長

塚本義隆

（頒価 一五〇円）